

香港 金庸漫画ガイド

1990年代以降のコミカライズ作品を、全作(だと思ふ)解説

金庸の全小説作品は、氏のご兄弟が運営する出版社「明河社」の著作権所有のもと刊行されています。コミカライズは明河社からライセンス授与されて行われます。ときどき明河社自身が漫画版の企画を立て、漫画家を招聘して刊行することもあります。

1950～70年代、豆本サイズの「連環画」や貸本漫画隆盛期、その後の薄装本漫画勃興期にはライセンスという概念そのものがなく、金庸作品は「西遊記」「水滸伝」などの古典演義小説と同じように誰もが好きなだけストーリーを借りて漫画化していました。今それをやるとエアライことになります。というわけでここでは著作権意識浸透後の1990年代以降、筆者が実際に入手して読んだ全作品を発行データ・ひとくち鑑賞ポイントともに御紹介します。

(注：小説ネタバレ記述があります。未読の方はご注意ください！)

書剣恩仇録

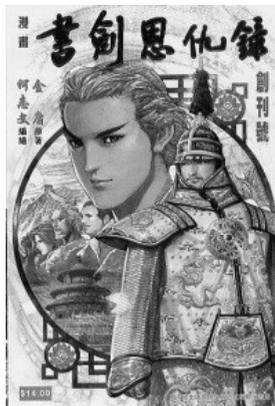
2005-06年
世紀少年創作出版有限公司

【作画：何志文】

1982年、玉郎機構のアシスタントで漫画業界入り。90年代初頭に「八仙飯店人肉叉焼包」など犯罪実録シリーズ、「天若有情」など青春もの漫画で頭角を現し、1997年の古龍武俠小説「絶代雙驕」(邦題「マーベラス・ツインズ」)コミカライズで大ブレイク。ついでオリジナル脚本ながら事実上の続編「絶世無雙」を執筆、これもヒット。「書剣恩仇録」は「絶世無雙」第1部と第2部のインターバル期間に制作された。

★ひとくちメモ★

これはかなり残念な出来。何志文の描く人物はノッペリツルンとしていて、ショタキャラやお花系キャラを描かせれば非常に魅力的。ゆえに古龍「絶代雙驕」は花無缺のキャラが絵柄にピタリとはまり大ヒットした。しかし「皇帝と荒くれ者」のギャップを面白さに活かした「書剣恩仇録」は、紅花会のワールドさが不可欠であり、そこがまったく描けていない。売上不振による打切だったようで、30巻でバタバタと話をたたんでいる。



原作発表：1955年
オールカラー薄装本
全30巻

射鵰英雄傳

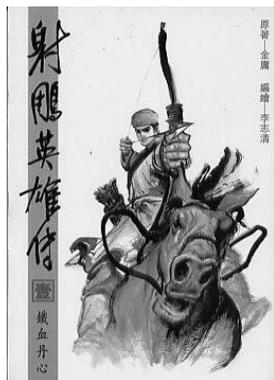
1998-2001年
明河社

【作画：李志清】

いわずとしれた香港最高の、いや世界最高の金庸絵師・李志清。漫画家キャリアの始まりは黄玉郎の「玉郎機構」。本作の執筆開始は1998年。この時点で三国志コミカライズ(日本語版も発行)、「孫子兵法」(2004年刊行「孫子攻略」の前身)、徳間書店の小説邦訳シリーズ表紙絵・さし絵を手がけるなど、すでに充分すぎるキャリアを積んでいた。

★ひとくちメモ★

香港金庸漫画唯一の邦訳済作品(徳間書店2009年、全19巻)。原著も明河社の手で何度もリイシュー発売され、街の大型書店や夏の見本市「香港書展」でも必ず販売される。分厚くて高いけど。誰もが「はじめて読む金庸漫画はこれ！」で意見一致する。コマ割りも香港薄装本スタイルではなく日本漫画寄りで親しみやすい。



原作発表：1957年
1色刷り単行本
全38巻